

住居のはなし

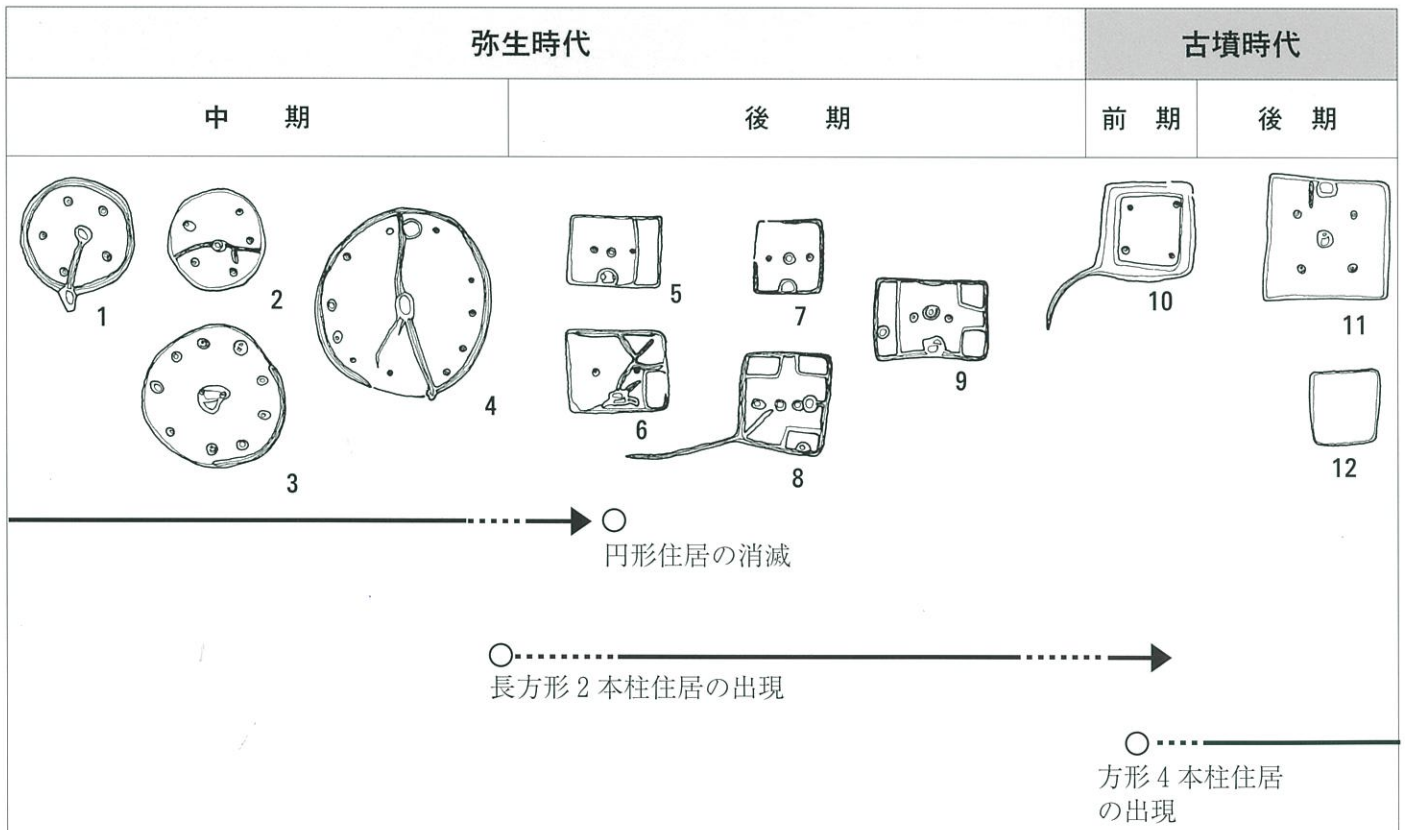
(竪穴式住居について)

「木の文化」と言われる日本では、世界文化遺産にも登録され、世界最古の木造建築物と言われる法隆寺五重の塔のような代表的な木造建築物がある他、古くは旧石器時代以降の竪穴式住居、その後新たに加わった掘立柱建物、以後現在にいたるまで木造建築物が造り続けられています。

この内、竪穴式住居は、旧石器時代から古代にいたる約1万年以上に渡って造り続け



久保長崎遺跡第3次調査 竪穴住居の分布状態



古賀市内における弥生時代中期から古墳時代の竪穴住居の変遷 (縮尺 1 / 400)

1. 花見第1地点1号住居 2. 浜山B地点5号住居 3. C地点3号住居 4. 高木4号住居
 5. 久保長崎第1地点2号住居 6. 8号住居 7. 久保長崎第3地点5号住居 8. 2号住居
 9. 1号住居 10. 太田町5号住居 11. 浜山B地点3号住居 12. 鹿部東町1号住居



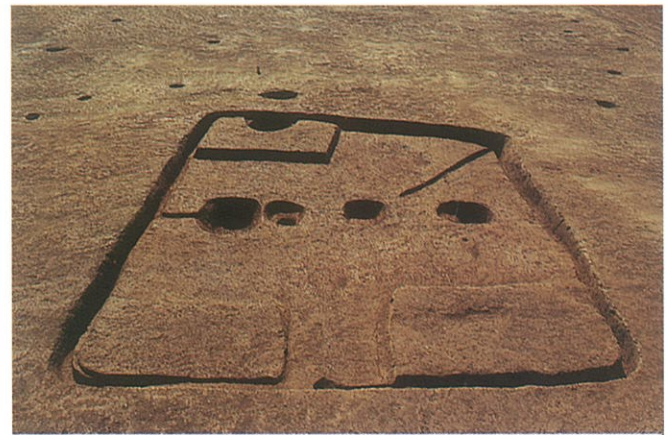
高木遺跡 4号住居



久保長崎遺跡第3地点 1号住居

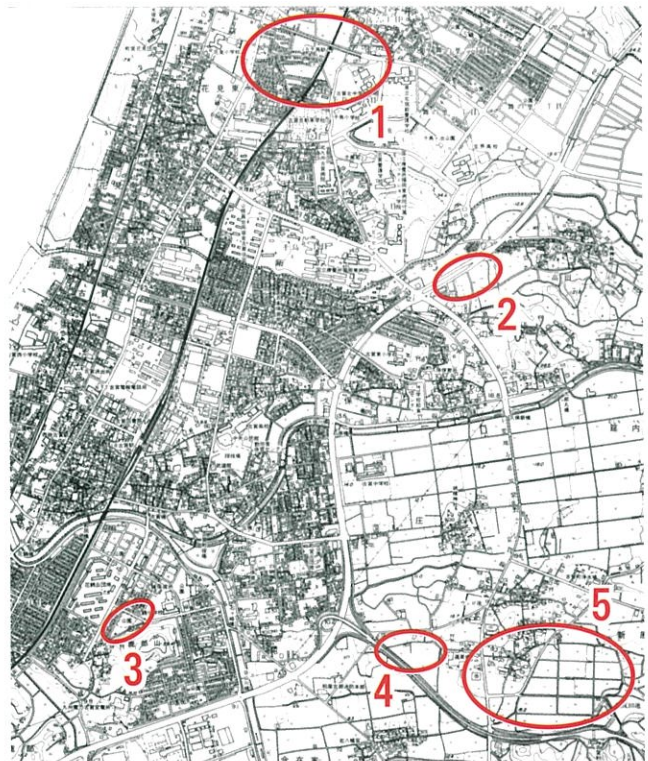
られた建物であり、誰しものが1度は聞いたことのある一般的な建物です。

このような竪穴式住居の古賀市内における変遷を弥生時代中期から古墳時代後期にかけて眺めた場合、まず、弥生時代中期の段階では平面形円形多主柱の住居が見られます。弥生時代中期後葉から後期前葉頃には、平面形長方形2本柱の住居へと推移し、その後古墳時代前期後葉頃には、平面形方形4本柱の住居へと変化しています。



久保長崎遺跡第3地点 2号住居

一般的に竪穴式住居は、狭く、暗い快適な居住施設ではないように思えます。しかし、竪穴式住居は、半地下構造の土間で草屋根（草葺きの上から土葺きの可能性も考えられています。）であったと考えられることから夏は涼しく、冬は暖かい環境であったと考えられます。またその広さは、小型の円形住居の場合、直径5mの住居であっても床面積で約15㎡、畳敷きで約9畳の広さとなります。さらに大型の直径10mを超える住居では、床面積で約31㎡、畳敷きでは約20畳の広さとなり、竪穴式住居が決して粗末なものではないことが分かります。



今回紹介した住居の遺跡分布図

1. 浜山・花見遺跡群
2. 久保長崎遺跡
3. 鹿部東町遺跡
4. 太田町遺跡
5. 高木遺跡